黄金風景

太宰治

海の岸辺に緑なす樫（かし）の木、その樫の
木に黄金の細き鎖のむすばれて
―プウシキン―

　私は子供のときには、余り質（たち）のいい方ではなかった。女中をいじめた。私は、のろくさいことは嫌（きら）いで、それゆえ、のろくさい女中を殊（こと）にもいじめた。お慶は、のろくさい女中である。林檎（りんご）の皮をむかせても、むきながら何を考えているのか、二度も三度も手を休めて、おい、とその度毎にきびしく声を掛けてやらないと、片手に林檎、片手にナイフを持ったまま、いつまでも、

ぼんやりしているのだ。足りないのではないか、と思われた。台所で、何もせずに、ただのっそりつっ立っている姿を、私はよく見かけたものであるが、子供心にも、うすみっともなく、妙に疳(かん)にさわって、おい、お慶、日は短いのだぞ、などと大人びた、いま思っても脊筋(せすじ)の寒くなるような非道の言葉を投げつけて、それで足りずに一度はお慶をよびつけ、私の絵本の観兵式の何百人となくうようよしている兵隊、馬に乗っている者もあり、旗持っている者もあり、銃担(にな)っている者もあり、そのひとりひとりの兵隊の形を鋏(はさみ)でもって切り抜かせ、不器用なお慶は、朝から昼飯も食わず

日暮頃までかかって、やっと三十人くらい、それも大将の鬚（ひげ）を片方切り落したり、銃持つ兵隊の手を、熊（くま）の手みたいに恐ろしく大きく切り抜いたり、そうしていちいち私に怒鳴られ、夏のころであった、お慶は汗かきなので、切り抜かれた兵隊たちはみんな、お慶の手の汗で、びしょびしょ濡（ぬ）れて、私は遂（つい）に癇癪（かんしゃく）をおこし、お慶を蹴（け）った。たしかに肩を蹴った筈（はず）なのに、お慶は右の頬（ほお）をおさえ、がばと泣き伏し、泣き泣きいった。「親にさえ顔を踏まれたことはない。一生おぼえております」うめくような口調で、とぎれ、とぎれそういったので、私は、流石（さすが）にいやな気がした。そのほかにも、

私はほとんどそれが天命でもあるかのように、お慶をいびった。いまでも、多少はそうであるが、私には無智な魯鈍（ろどん）の者は、とても堪忍（かんにん）できぬのだ。

一昨年、私は家を追われ、一夜のうちに窮迫し、巷（ちまた）をさまよい、諸所に泣きつき、その日その日のいのち繋（つな）ぎ、やや文筆でもって、自活できるあてがつきはじめたと思ったとたん、病を得た。ひとびとの情で一夏、千葉県船橋町、泥（どろ）の海のすぐ近くに小さい家を借り、自炊の保養をすることができ、毎夜毎夜、寝巻をしぼる程の寝汗とたたかい、それでも仕事はしなければならず、毎朝々々のつめたい一合の牛乳だけが、ただそ

れだけが、奇妙に生きているよろこびとして感じられ、庭の隅（すみ）の夾竹桃（きょうちくとう）の花が咲いたのを、めらめら火が燃えているようにしか感じられなかったほど、私の頭もほとほと痛み疲れていた。

　そのころのこと、戸籍調べの四十に近い、瘦（や）せて小柄のお巡（まわ）りが玄関で、帳簿の私の名前と、それから無精髯（ぶしょうひげ）のばし放題の私の顔とを、つくづく見比べ、おや、あなたは……のお坊ちゃんじゃございませんか？　そう言うお巡りのことばには、強い故郷の訛（なまり）があったので、「そうです」私はふてぶてしく答えた。「あなたは？」

お巡りは痩せた顔にくるしいばかりにいっぱいの笑をたたえて、

「やあ。やはりそうでしたか。お忘れかもしれないけれど、かれこれ二十年ちかくまえ、私はKで馬車やをしていました」

Kとは、私の生れた村の名前である。

「ごらんの通り」私は、にこりともせずに応じた。「私も、いまは落ちぶれました」

「とんでもない」お巡りは、なおも楽しげに笑いながら、「小説をお書きなさるんだったら、それはなかなか出世です」

私は苦笑した。

「ところで」とお巡りは少し声をひくめ、「お慶がいつもあなたのお噂（うわさ）をしています」

「おけい？」すぐには呑（の）みこめなかった。

「お慶ですよ。お忘れでしょう。お宅の女中をしていた――」

思い出した。ああ、と思わずうめいて、私は玄関の式台にしゃがんだまま、頭をたれて、その二十年まえ、のろくさかったひとりの女中に対しての私の悪行が、ひとつひとつ、はっきり思い出され、ほとんど座に耐えかねた。

「幸福ですか？」ふと顔をあげてそんな突拍子ない質問を発する私のかおは、たしかに罪人、被告、卑屈な笑いをさえ浮べていたと記憶する。

「ええ、もう、どうやら」くったくなく、そうほがらかに答えて、お巡りはハンケチで額の汗をぬぐって、「かまいませんでしょうか。こんどあれを連れて、いちどゆっくりお礼にあがりましょう」

私は飛び上るほど、ぎょっとした。いいえ、もう、それには、とはげしく拒否して、私は言い知れぬ屈辱感に身悶え（みもだえ）していた。

けれども、お巡りは、朗かだった。

「子供がねえ、あなた、ここの駅につとめるようになりましてな、それが長男です。それから男、女、女、その末のが八つでことし小学校にあがりました。もう一安心。お慶も苦労いたしました。なんというか、まあ、お宅のような大家にあがって行儀見習いした者は、やはりどこか、ちがいましてな」すこし顔を赤くして笑い、「おかげさまでした。お慶も、あなたのお噂、しじゅうして居(お)ります。こんどの公休には、きっと一緒にお礼にあがります」急に真面目(まじめ)な顔になって、「それじゃ、きょうは失礼いたします。お大事に」

それから、三日たって、私が仕事のことよりも、金

銭のことで思い悩み、うちにじっとして居れなくて、竹のステッキ持って、海へ出ようと、玄関の戸をがらがらあけたら、外に三人、浴衣（ゆかた）着た父と母と、赤い洋服着た女の子と、絵のように美しく並んで立っていた。お慶の家族である。

私は自分でも意外なほどの、おそろしく大きな怒声を発した。

「来たのですか。きょう、私これから用事があって出かけなければなりません。お気の毒ですが、またの日においで下さい」

お慶は、品のいい中年の奥さんになっていた。八つ

の子は、女中のころのお慶によく似た顔をしていて、うすのろらしい濁った眼でぼんやり私を見上げていた。私はかなしく、お慶がまだひとことも言い出さぬうち、逃げるように、海浜へ飛び出した。竹のステッキで、海浜の雑草を薙ぎ払い薙ぎ払い、いちどもあとを振りかえらず、一歩、一歩、地団駄踏むような荒んだ歩きかたで、とにかく海岸伝いに町の方へ、まっすぐに歩いた。私は町で何をしていたろう。ただ意味もなく、活動小屋の絵看板見あげたり、呉服屋の飾窓を見つめたり、ちえっちえっと舌打ちしては、心のどこかの隅で、負けた、負けた、と囁く声が聞えて、これはなら

ぬと烈（はげ）しくからだをゆすぶっては、また歩き、三十分ほどそうしていたろうか、私はふたたび私の家へとって返した。

うみぎしに出て、私は立止った。見よ、前方に平和の図がある。お慶親子三人、のどかに海に石の投げっこしては笑い興じている。声がここまで聞えて来る。

「なかなか」お巡りは、うんと力こめて石をほうって、「頭のよさそうな方じゃないか。あのひとは、いまに偉くなるぞ」

「そうですとも、そうですとも」お慶の誇らしげな高い声である。「あのかたは、お小さいときからひとり

変って居られた。目下のものにもそれは親切に、目をかけて下すった」

私は立ったまま泣いていた。けわしい興奮が、涙で、まるで気持よく溶け去ってしまうのだ。

負けた。これは、いいことだ。そうなければ、いけないのだ。かれらの勝利は、また私のあすの出発にも、光を与える。

底本：「きりぎりす」新潮文庫、新潮社
　　１９７４（昭和49）年９月30日発行
　　１９８８（昭和63）年３月15日29刷改版
　　１９９６（平成８）年９月25日46刷
初出：「国民新聞」
　　１９３９（昭和14）年３月
入力：深水英一郎・加藤るみ
校正：加藤るみ
１９９９年１月１日公開
２００４年３月４日修正
※「日本文学(e-text)全集」作成ファイル

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです